

座談会 心に残る言葉と出会う

青山 由紀

(あおやま ゆき)
筑波大学附属小学校教諭



松木 正子

(まつき まさこ)
お茶の水女子大学附属小学校教諭



吉永 幸司

(よしなが こうし)
京都女子大学教授



子どもたちが自然に話せる入門期の第一教材とは

吉永 入学したばかりの子どもは、勉強したいという気持ちがいっぱいですので、その期待に応えるとともに、小学校に入ってきてよかったと思うような第一教材になればいいかと考えました。

青山 教科書で最初に出会った教材は、何年たっても覚えているものですかね。

吉永 入門期の子どもたちというのはそれまでの生活はみんなばらばらです。ですから、一つの土俵に乗せなくちゃいけないと思いますし、その教材は、子どもたち一人一人にとって身近なものでありたいと思うんです。ある程度知っていたり見ていたりするもの、それを手がかりにもっと知りたいという願いを満足させるものがないと思うんです。

松木 絵の中にいろんな情報があって、子どもがそれを探し出して自分の言葉で伸び伸びと発言できる。それが国語教育の第一歩だと思っんです。そのための素材として

言葉を自由に使えるようにならないかということが話題になっていましたね。そうして検討していつ、いちばんふさわしい言葉として「おはよう」になったんです。

青山 「おはよう」という言葉は現行版の第一教材でも出ていますね。それまでの文字指導のあり方から見ると現場の抵抗が大きいかたと心配したんです。けれど、一年生をよく受けもたれている先生は、「おはよう」がとてもいいと言います。やっぱり、子どもの生活の中でまず覚えて、使ってほしい言葉として「おはよう」を大切にしたいということでしょうか。「おはよう」というあいさつは、これから学校生活をしていくうえで、自分から働きかけていく能動的な言葉として、とってもよいのではないのでしょうか。

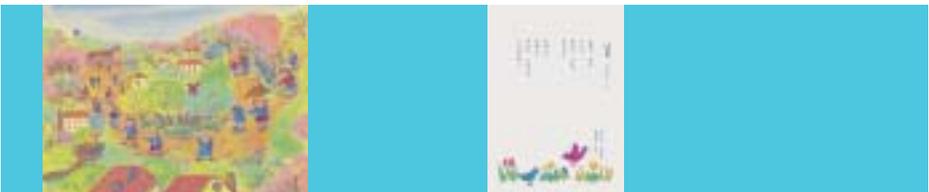
松木 知らない人と出会ったときに、突然「今日、何食べてきましたか？」って話だすわけにはいかないですよ。そういうときに、「こんにちは」「って言えばね」「今日は暑いですね」「とか」「今日は寒いですね」

の第一教材でありたい。文字はわからなくてもいい。まずみんなの前で自分が思ったことを自然に話せるようにしてやりたい。そのためには、ファンタジックな絵や場面もいけれど、子どもたちの身近な世界にいったん戻してやる必要があるのではないかと思います。国語教室の第一歩は、いかに子どもの心を開放し、居場所を作ってやるかということだと思います。

言葉との出会いをどう仕組むか

青山 編集会議では、第一教材で子どもたちにとってどのような言葉に出会わせるかということが、とても重要な議題でした。どの先生方も、自分の小さいころの教科書はこの言葉だったと覚えていらっしゃる。

松木 文字提出といつのは教科書づくりでは非常に大切で、それをどのように考えるかということがいちばんの議論のもとでした。どのページからどの程度の文字を出すかということについては、本当にいろいろな考えの方がいらっしゃる。だけど、十七年度版の編集会議では、あまり制約をせずにいろいろな



と続き、次はわりとすんなりいろいろなことが話せますね。初めのひと言が言えなかったために人間関係がギクシャクするようなことが最近多いような気がします。

以前に、「せんせい、あのね。」っていう呼びかけの言葉がありましたけれど、ちょっとした「手続きの言葉」があるだけで、いくらでも言葉は紡ぎ出せるんですよね。いちばん最初の教材は、教室の中にそんな言葉がふつと出てきやすくなるというかなと思いますね。国語教室のそれこそ「言葉開き」ですから。

吉永 この絵の中に、「おはよう」という言葉が向き合っているでしょう。この「おはよう」「おはよう」は、言葉の呼びかけ合いなんです。挿絵の中の女の子が「おはよう」と言つて、みんなが「おはよう」と言つて、「この一枚の絵の中に子ども声がいっぱい詰まっている。しかも、その「おはよう」の呼びかけ合いがそのまま教室の「おはよう」になって、そして新しい一日がつくられていくというふうになったらいい

ださいました。それで、これだーということになったんです。

松木 中川先生の詩がとても素敵だったんですよね。それで、この詩を第一教材に入れていきたいという皆さんの希望が強かったんです。でも、文字指導にこだわると、このままでは入れにくい。悩んだ結果、だつたら、だんだん明るくなっていく朝の光の中の教室に行く喜びを絵で表すことにしました。みんなで口ずさんでもらえればいいということになったんです。

青山 だつたら曲がついたらもっといいね、ということになって。中川先生は、暗唱しやすいように、子どもが口ずさみやすいようにと、言葉にこだわって作ってくださったので、楽しくって、明るい、子どもたちがすぐに覚えて歌えるような歌を斎藤ネコさんにお願いしました。そうしたら、本当にぴつたりの、素敵な曲を作ってくれました。

松木 自分の心の中に残る言葉は、やっぱり希望に満ちた言葉であってほしいでしょう。天気がいい日や登校するときに歌



なあと。それで、あえて両側から呼びかけるような位置に「おはよう」の文字があるんです。

子どもたちは自分たちが行く前の教室なんて予想もつかないし、考えてもいないでしょう。けれど、ああ、そういう所へぼくらは行くんだ、教室はみんなを待っていてくれるんだというふうなことで、「あさのひかり」「きらきら」なんです。「ひかり」というのは、希望があつて、「かがやく」とか「あかるい」とか夢のある言葉がいっぱい生まれてくるでしょう。

明るく楽しく歌って始まる国語の学習に

吉永 子どもの日常生活にある言葉が、初めて開いた教科書に出ているということになれば、子どもたちは、教科書を身近に感じるようになりやすよね。まったく意味のない言葉がなんとなく並んでいるのではなく、生活の中にある言葉で何かいいものに会わせたいという願いがありました。親しみもてる詩とか、文とか。そうしたら、中川李枝子先生がすばらしい詩を書いてく

ってくれたり、口ずさんでくれたら本当にいいですね。

吉永 そうですよ。そうなれば絶対忘れないと思います。

言葉がたくさん生まれてくる絵

青山 中川先生の詩には、実は「いちねんせいを まっている」というフレーズがあったんです。それがとても素敵なので、この絵には、まだだれも来ない一年生の教室があり、鳥さんたちもみんな一年生を待っているという情景をかいてもらいました。

松木 これは一年生の導入單元なので、文字指導に縛られたくない。子どもたちがこの絵を見ながらいろいろなものを探していけるような絵にしたい。本当に道草を食っていけるような絵にしたい。人とのつながりを表すこともできるような、朝の光で輝いているような、待っていてくれる教室にぼくたちは行くんだと思えるような、そんな絵にしてほしいと、いろいろ注文を出したのです。

絵を見て子どもたちに自分の思いを語ら



せるとき、情報量の多い絵を置いておきたいということがあるんですよ。そのためには、ファンタジックな絵という考え方もありますが、こういう生活的な場面で生きる力につなげていくという考え方もある。とにかく絵に多くの情報量を盛り込むように、画家の相野谷由起さんにもぜひぶんぶん無理をお願いしました。

吉永 話としてはおもしろくても、ファンタジックなものだと、想像力豊かな子は結構入っていきけるけれど、そうじゃない子には難しいところもあるんですよ。入門期の国語の勉強というのは、身近な言葉を自分のものにしていくための出発点だと思います。意見の言えない子も、ただ聞いているだけじゃなくてお話の中に入っている。この女の子、ひよっとするとわたしかもしれないことになると、また、見方が変わってきますよね。だから、いろんな子がいろんな考え方で入っていきけるような絵がいいんじゃないかということになったんです。

青山 編集の途中で一年生の子どもたちに

るんですよ。だから、最初にみんなで詩を声に出して読んで歌って、絵を楽しんでもいいし、書けるようになってからこの詩をノートに書いてもいいし、いろいろな学習のパターンが考えられるんじゃないでしょうか。

自分の成長が確かめられる教科書

松木 巻頭の詩もそうですが、「まほうのほつぎで／そら じぶ おはさん。…」など、唱歌歌のようになっているところがいくつもありますね。前からずっと、光村図書の方針としてあったと思うのですが、なるべく詩のような形で子どもたちが唱えて、言葉になじませるといったことがあると思います。本来的に言葉ってというのは身体全体に取り込んでいくものだから、こういう形の指導が積み重ねられれば、全学年を通したきちっとした基礎になると思います。

吉永 教材の中に、自分の名前を書くところがあるんです。一年生というのは、成長する姿がよく見える学年なんです。例えば、先生に話せるようになった、みんなの



絵を見せたんですが、「これ何年生くらいだよ。」「上級生じゃない?」「ちゃんみたいな子がいる。」とか言って、友達を見つかり自分をみつかりしてましたから、子どもたちはこの教材の中にすつと入っていきけると実感しました。

吉永 教科書の絵を見ると、「おはよう」の言葉だけじゃなくて、「これから遊びに行こうか。」とか、「何もってきたの?」と、子どもたちがかわり合っている部分がたくさんありますよね。日常生活のことが言葉になるのがいいと思います。一年生の子にとって、言葉なんてなかなか出てこないのが普通です。ですから、日ごろ言っている言葉を文字にしてやって、「あなたの言った言葉はこれよ。」って取り立てて教える、文字と言葉がつながっていくのです。

青山 この絵だと、言葉がいっぱい出てくるんですよ。とても自然に。この教材で、子どもたちは話すことが好きになってくれたらいいなと思います。

松木 「はる」の詩とこの絵は、呼応して

前で言えるようになった。字が書けるようになったなど、どんどん変わります。初めて書いた自分の名前を大事に残してほしいと思います。折々にその字を見て、成長する自分の励みになるようになってほしいな。そして、一年の最後まできたとき、お話を読めるようになった、たくさん書けるようになった自分を確認する。「できる」を増やしていく、それが大事だと思います。初めて書いた名前の文字を見て、どの子ども自分の成長や、自分のよさが見えてくればいいなと思います。

青山 「はなのみち」をいちばん最初にもつてこようかという話もあったくらい、お話をたくさん出会わせたい。先生方には、いっぱい読み聞かせしてほしいという願いがあったんですよ。読み聞かせをして、それぞれ別の感想を出し合ったりして、みんなで読むと楽しいなあという経験もたくさんさせたいと思います。